

# いつも一緒 富山のペットたち

気温が上がると、強い日差しが降り注ぐこの季節は、熱中症に気を付けなければなりません。熱中症は、直射日光に当たって起こる日射病と、高温多湿の環境下などで起こる熱射病があります。体温の異常上昇がさまざまな体の不調を引き起こし、時には命にかかわることもあります。



保田 信一

ドリトル動物病院院長  
(滑川市上小泉)

体は、体温が上昇すると、それを下げられるために熱を放散しなければならず、体温調節の仕組みの一つとして体内の水分を蒸発させています。蒸発の方法には、汗腺から汗として体の表面から水分を蒸発させる方法と、パンティンク（あえぎ呼吸）といわれる方法があります。

体が毛で覆われた犬や猫は、体温を下げる汗腺がほとんどなく、わずかに足の裏の肉球（マメ）の部分にあるだけです。そのため体温調節はパンティンク、つまり口を開けてハアハアと早く呼吸をして、気道からの水分を蒸発させることによっても行っています。これは、犬でよく見掛けることでもあります。

一方、多くの猫は、体温が上がる前にいつもの間にか涼しい所に逃げ込み、寝そべって体温調節していることが多いようです。

## 犬の熱中症



愛らしい表情が人気のペギニーズ。短頭種は熱中症にかかりやすいため注意が必要だ＝ドリトル動物病院

# 涼しい所で休ませてください

熱中症でよく来院する動物は圧倒的に犬が多く、このことは犬の体形や生活習慣などと深くかかわりがあります。近年、犬は首が短く、鼻がつぶれたような体形の短頭種に人気があり、シーズー、フレンチブルドッグ、ペギニーズ、ボクサー、ポストンテリア、ブルドッグなどをよく見掛けます。これらの犬は、その頭の特徴から特に呼吸器系の病気にかかりやすく、体温が上がると、パンティンクも人一倍、いや犬一倍？ 頑張らなくてははいけません。

胸が長く、足の短いミニチュアアタックスフントやウエルシュユコーギーなども地表からの熱を体に蓄積してしまいがちで、

熱中症にかかりやすい体形といえます。彼らがご主人様の都合で夏の暑い日の炎天下にいたり、呼吸が荒くなり、口から泡を吐いて、失神してしまうこともあります。

そのほかの種類でも、肥満や糖尿病にかかっていたり、高齢であったり、心臓に持病がある場合は注意が必要です。高温多湿の環境で過ごしたり、直射日光を浴びることにより、体温調節がうまくいかず、たやすく熱中症を起こす危険性があるからです。

もちろん健康な犬でも発症します。冷房の止まった閉め切った部屋の中や車の中などの留守番、炎天下や夕方涼しくなったからと熱いフライパンのようなアスファルト上での散歩、飼い主を待ってペットホテルで鳴き続けたことなどが原因で、突然熱中症を起こすことがあります。

あまりの暑さで水をがぶ飲みして吐き続けたり、激しい下痢や体温の上昇によって脱水症状を起こしてショック状態に陥ると、心臓や脳神経、腎臓が急激に機能しなくなり、命にかかわる状態となることもあります。熱中症かなと思ったら、体を冷やすために水につけるとか、冷房の効いた涼しい場所で休ませるなどの応急処置をして、動物病院で診てもらってください。

いづれにしても予防が一番大切です。日ごろから愛犬の体の状態を観察し、その日の温度、湿度などを天気予報でまめにチェックして、犬のいる環境を整えてください。また、年に1回は、動物病院で血液検査や体重測定をして、健康状態や栄養状態を把握しておくようにしてください。

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第一木曜日に掲載します。